同志社の逸品

— collection 5 —

デントン愛用の家具

同志社女子大学史料センターの常設展示会場の一隅に、洋家具のカウチ、日本製洋家具の藤座の椅子、スクエアテーブル、引き出し付きデスク、鏡台付き箪笥（たんす）、それに、障子をモチーフにした和のデザインの電気スタンド等が展示されている。これらは、いずれも、デントン・ハウスに居住したメリー・フローレンス・デントンが愛用していた家具類である。

デントンは、太平洋ウーマンズ・ボード派遣の宣教師で、「同志社女子部の母」といわれる人物である。１８８７年、アメリカで小学校の校長を務めていた時、休暇でアメリカに帰国中であったアメリカン・ボード宣教師（同志社教員）Ｍ・Ｌゴードンと出会い、日本の京都に新島襄という男がいてキリスト教に基づく教育に命を賭けていることを知ったデントンは、翌年来日し、60年間、昭和戦時下にも帰米せず、同志社女子部のために力を尽した。

デントン・ハウス（現・新心館の辺り）は、１９０９年に建設され、１９５８年には新心寮を増築するために一部が取り除かれ、その後撤去されることとなった。デントンは、１９０９年から彼女が逝去する１９４７年までの日々を暮した。デントン・ハウスは、もとは同志社女学校最初の校舎の東翼部で、デントンの住居として移築し建て直されたものである。１９１２年まではその２階が教室としても使用されていた。また、デントン以外の外国人教師の住居でもあり、さらにはゲストの宿泊所でもあり、京都の社交の場の一つでもあった。現存する芳名録には、新渡戸稲造の署名もある。ある外交官はデントン・ハウスのことを「ホワイトハウスのそれを除いてもっとも興味深いパーラー（談話室）」と評し、また、あるゲストは「京都は日本の心、デントンさんの家は京都の中の欧米の心」と表現した（F.B.Clapp, Marry Florence Denton and the Doshiha, 1955. p.166）。

同志社を拠点として日米の懸け橋となり、晩年には「同志社の宝」とよばれたデントン。その日々を支えた、今は、あるじなき家具類の一点一点は、まさしく同志社の逸品である。

２０１５年、デントンの「無私の協力者」であった星名ヒサ（１９１３年、恩師のデントンに強く請われて同志社女学校に着任。裁縫を担当。１９３０年からは同志社女子専門学校教授）の実家である末光家（戦時下の同志社にあって新島精神を死守した末光信三は星名ヒサの実弟）から、スクエアテーブル（一柱式台付き卓子）と櫛形のウィンザーチェアに類似の椅子が史料センターに寄贈された。

（女子大学教授　大島中正）

参考文献

赤澤真理・中西美香・田中厚子（２０１５）「同志社女学校デントン・ハウスの平面構成・室内意匠の復原的検討」『同志社女子大学学術研究年報』第66巻

日比惠子（２０１１）「Ｍ・Ｌ・ゴードンとＭ・Ｆ・デントンの出会いをめぐって」『同志社女子大学史料室講演会記録』三

同志社女子大学史料室は、２０１６年４月より、事務機構に関する規程の改正により名称が「同志社女子大学史料センター」と変更された。